

氏 名	植 苗 昭 男 うえ なえ あき お
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 296 号
学位授与の日付	昭 和 41 年 6 月 21 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	雌性生殖器系リンパ装置の比較解剖学的研究

論文調査委員 (主 査)
教 授 堀井五十雄 教 授 西村秀雄 教 授 岡本道雄

論 文 内 容 の 要 旨

粘膜上皮下リンパ組織の研究は、消化呼吸管については多数の研究があるが、泌尿生殖管については研究が少なく、比較解剖学的にこれを論ずる材料に乏しい。

著者は哺乳類雌性生殖管粘膜上皮下リンパ組織の比較解剖学に資するため研究を行なって、つぎのような結果を得た。

- 1) ヒト卵管では子宮部に限って出現し、しかも必ず粘膜ヒダに沿って出現する。
- 2) ニホンザルでは卵管にはリンパ組織の出現をみない。子宮では体にはないが、頸管には常に出現し、リンパ浸潤とリンパ小節とは相半ばし、リンパ小節の3/4は二次小節（明中心）をもつ、腔粘膜はリンパ組織にとみ、下半部に多く、3/4はリンパ小節で、いずれも二次小節をもつ。
- 3) カイウサギでは一般にリンパ浸潤のみでリンパ小節は全く現われない。卵管では少数、子宮では体にも頸管にもほぼ毎常、腔には多数のリンパ浸潤をみとめた。
- 4) イヌでは卵管、子宮ともにリンパ組織がない。腔では毎常みとめたが、下半部に多く、リンパ浸潤が主体で、少数のリンパ小節を混ざる。
- 5) ネコではリンパ浸潤ばかりで、リンパ小節はみられない。卵管には欠き、子宮では少数、腔では全例に出現し、下半部に多い。モルモットの場合もほぼ同様である。
- 6) ラットではリンパ組織はきわめて少なく、子宮体部に稀にリンパ浸潤をみとめたのみで、腔粘膜にも出現しない。
- 7) 要するに、雌性生殖器系粘膜は一般にリンパ組織の少ない部分で、それでもほぼ恒常的に出現するのは腔粘膜で、上半部に比で下半部に多く、時には二次小節を具えた定型的孤立リンパ小節が出現する。子宮では体にはほとんどなく、頸管では多数例にリンパ浸潤をみとめる。卵管ではヒトの全例とウサギの半数例に子宮部に限ってリンパ組織をみとめた。

以上の粘膜リンパ組織はいずれも上皮下リンパ組織で、リンパ浸潤と有二次小節リンパ小節との間には

連続的な移行像がみとめられた。

論文審査の結果の要旨

消化，呼吸器系に比べると，泌尿生殖器系はリンパ組織の出現も一般に少なく，これに関する研究も乏しい。植苗は比較解剖学的な立場から各種の哺乳動物について雌性生殖器系粘膜リンパ組織を検索し，つぎの結果をえた。

- 1) ヒト卵管では子宮部に限って出現し，しかも毎常必ず粘膜縦ヒダに沿って出現する。
- 2) ニホンザルでは卵管には出現しない。子宮では頸管に限って現われ，腔粘膜はリンパ組織に富み，かつ，下半部に多く，これらのリンパ小節は二次小節をもつものが多い。
- 3) カイウサギでは一般にリンパ浸潤だけで，リンパ小節は全くみられない。卵管子宮部，子宮体および頸，腔などに現われる。
- 4) イヌでは卵管，子宮ともになく，腔には毎常現われるが，下半部に多くリンパ浸潤が主体である。
- 5) ネコではリンパ浸潤だけで，リンパ小節はなく，卵管には欠き，子宮では少数，腔では毎常現われ下半部に多い。モルモット，ラットなどもほぼ同様であるが，ラットは最もリンパ組織に乏しい。
- 6) 要するに雌性生殖器系粘膜は一般にリンパ組織が少ないが，腔粘膜にはほぼ恒常的に出現し，下半部に多い。子宮では体にはほとんど欠き，頸管には多数例でリンパ浸潤が出現する。卵管ではヒトでは毎常，ウサギではほぼ半数例に子宮部に限ってリンパ組織をみとめた。以上の粘膜リンパ組織はいずれも上皮下リンパ組織で，その部の上皮には明らかに特異性がみられ，リンパ浸潤と有二次小節リンパ小節の間には明らかな連続的な移行がみられた。

本論文は学術上有益にして医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。